国語（問題）

2013年度

〈2013 H25072023〉

注意事項

1 問題冊子および記述解答用紙は、試験開始の指示があるまで開かないこと。

2 問題は2～9ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。

3 解答はすべて解答用紙の所定欄にHBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。

4 受験番号および氏名は、試験開始後、解答用紙の所定欄（2か所）に正確にていねいに記入すること。記述解答用紙の所定欄（2か所）には受験番号と氏名を、マーク解答用紙の所定欄には氏名のみを記入すること。

受験番号の数字は特に正確に記入すること。読みづらい数字は採点処理に支障をきたすことがあるので、注意すること。

数字見本
0
1
2
3
4
5
6
7
8
9

5 マーク欄には、はっきり記入すること。また、訂正する場合は、消しゴムでていねいに、消し残しがないようによく消すこと（砂消しゴムは使用しないこと）。

マークする時	●良い	◐悪い	○悪い
マークを消す時	○良い	◐悪い	○悪い

6 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。

7 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

（一）

次のA・B・Cの三つの文章を読んで、あとの問いに答えよ。なお、Bの文章は、Aに触れられている南方熊楠の文章の一節、Cの文章はAに触れられている谷川健一の文章の一節である。

A

飛騨を歩いていた時、高山市上宝町田頃家の清水牧之助さん（明治四〇年生まれ）から聞いた話が心に残っている。――自分の屋敷でも、家を建て替える時には解体後直ちに新しい家の基礎工事にかかってはいけない。一旦、屋敷地を自然に帰さなければならない。そのためには、建物を壊し、平した地に植物の種を蒔くとよい。「菜蕎麦三日」といって、蕪や蕎麦は蒔いてから三日で芽が出る。芽が出れば、屋敷地は自然に帰ったことになる。その後、初めて基礎工事にかかってよいことになるのだと伝えられている――。人は屋敷とする大地を自然から借りている。長い間使い続け、抑圧を重ね与えてきた地霊に、たとえいっときでも礼を尽し、自然の状態でゆったりしてほしい、という住まう者の思いがここには滲んでいる。井戸を埋めた跡には息抜きの竹を立てるものだという話は各地で耳にしたり、何度もその竹を見たことがある。こうした伝承の中には、この国の人びとが地霊・精霊に対して細やかな心づかいをしてきたことが示されている。このような心性は古代まで遡源することができる。『常陸国風土記』行方郡の条には山の地主神と人との拮抗が描かれている。「山口に至り、標の梲を堺の堀に置て、夜刀の神に告げていひしく、「此より上は神の地と為すことを聴さむ。此より下は人の田と作すべし。今より後、吾、神の祝と為りて、永代に敬ひ祭らむ。冀はくは、［ I ］」といひて、社を設けて、初めて祭りき。」――水田を開発することは夜刀の神の地を変容させ、奪うことにもなる。無節操な開発を慎み、礼を尽さなければ祟りを受けることが語られ、神の地、地霊の坐す地を人が変容させた場合には慎重に祀り続けるべきであることが記されている。

東京都大田区羽田五丁目の穴守稲荷は文政年間（一八一八―三〇）にこの地の名主鈴木弥五右ヱ門が数町歩を埋め立て、新田開発を行った際に祀ったものだという。地霊や、棲み家を追われた狐を祀り込んだものであろう。宮田登はこの稲荷に注目し、その変転を追って次のように述べている。「現在、羽田空港の駐車場のど真中に鳥居を残してなお頑張っている羽田稲荷の変転は、日本のカミと人と土地の結びつきを知る上に興味深い事例を提供している。」――考えてみれば、羽田空港駐車場は、まず、新田開発され、さらに、都市化に際して再開発されたことに気づく。その後も変容を重ねたのである。地霊は長い間［ 甲 ］を受け続けてきたのだった。しかし、孤立した鳥居だけでも残っていれば良い方である。

近代以降、とりわけ、高度経済成長期よりこの方、都市開発・都市集中・工業団地の開発などが止むことなく続いている。山は削られ、農地は埋め立てられ、湿地や海辺も埋め立てられた。それは地方都市にも及び、そこでは、さらに郊外型大型店舗が主要道路沿いに覇を競うように出現している。

［ 乙 ］

さて、開発による地霊の呻きは、それに対する対応は別として、誰もが気づくところであろう。しかし、もう一つの地霊の呻き、地霊の深い嗟嘆があることは意外に気づかれていないようだ。都市開発や都市集中に対して、地方の過疎化が進み、このところその加速が著しい。少子高齢化・地域格差の波と重なり、限界集落という悲しい呼称とその実態の波がひたひたと寄せている。一四〇〇以上の集落が遠からずこの国から消えてゆくという。また、平成の大合併にともない、歴史と地霊を背負った多くの地名が消えた。

地霊は本来、一定範囲に遍在するものと考えられるのだが、その凝結の場、凝結点があると考えてもよかろう。それは、先人たちの感性・心性・感応力によって感知され、選ばれたものである。それは、岩であり、巨樹であり、淵であり、時には山でもあった。そして、それらは世代を越えて伝承され、多くの人びとの眼ざしと祈りを受け、語り継がれてきた。地霊凝結の場、地霊と他の精霊とが複合した聖なる場は固定化し、守り継がれた。

イエイエの屋敷神もムラの聖地もこうして生まれ、守り継がれてきたのである。しかし、廃家が増え、廃れ、消えゆくムラムラが増してゆけば、特定の場に凝集された地霊や、小さな民俗神は、梯子をはずされ、忘れられ、やがて忘却の淵に沈むことになる。ムラの誕生とともに耕地が開拓される。その折、地霊は一度目の痛みを覚える。人は、その耕地を末永く使わせていただくことを約束して地霊を祀る。にもかかわらず、その耕地を捨ててムラを去る。耕地は荒蕪地と化す。置き去りにされた地霊や民俗神は二度目の嘆きを味わうことになる。屋敷地もまた然り。地霊を鎮め、借り受けて屋敷神を祀る。そして廃家となり、地霊・屋敷神は梯子をはずされ、叢に埋もれてゆく。無垢の大地を、耕地・屋敷地・里山として、人びとが一定のモラルを持って利用し、暮らすことを承知した地霊は、イエの廃絶やムラの消滅によって約束を破られることになる。ムラは山野に帰してゆく。近年かまびすしい獣どもの害獣的側面の露呈は、地霊の怒りや、それと複合する上部概念たる山の神の逆襲の一端だと見ることもできよう。地霊の孤絶感は深かろう。無節操な開発に対する地霊の呻きに対するもう一つの地霊の呻きは、梯子をはずされ、置き去りにされた嗟嘆であり、呻きである。

人と地霊の相渉は、別な見方をすれば人と自然環境との相渉であり、それは人の姿勢によって変化する。地霊とのかかわりの放棄、地霊や精霊を忘れ去ることは環境破壊や環境の荒廃につながる。さればこそ、今、この国の先人たちが地霊・精霊・小さな民俗神などとどうかかわってきたのかをふり返ってみなければならないのだ。

地霊は遍在する。そして、不可視である。人はじつに長い間その地霊とかかわって生きてきた。地霊に対する人の認識は時代により、立場により、また、環境によって異なった。振幅はあるにせよ、人は、地霊を意識する際に「［ Ⅱ ］」と「相対性」を認めてきたはずである。地霊は、絶対的に人と対立し、暴発し、乱動するものでもないし、また、常に親和的であるとも限らない――そう思われてきたのである。人の思いや営みを鏡のごとく反映する側面を持つという認識は時を溯上するほどに強かったはずなのだが、そうした意識は弱まったとはいえ、現今にまで底流し続けている。もとより個人差はある。

地霊は遍在するのだが、特定の地の個性、特定の形象を以って、特定の霊力を人に発信し続ける例が多い。そうした場は、いわば、地霊の凝集点・凝結点であり、そのような地の中には、地霊が諸々の精霊と複合し、異様な霊性を発し続ける例もある。南方熊楠は、「南紀特有の人名――楠の字をつける風習について」という文章の中で、楠の樹霊と熊楠の魂の交感体験を語っている。熊楠が楠の樹霊と交感した場は、地霊と樹霊の複合した場であり、それは、先人たちの多くの眼ざしと魂を受け続けてきた民俗的な、地霊と樹霊の複合の場であった。こうした、民俗的な場は、熊楠のような、感性・心性の鋭敏な人によって、さらに霊性・聖性を強く意識され、守られてきたのだった。

谷川健一の『魔の系譜』の中に「地霊の叫び」と題する鋭い一文がある。そこには、人と精霊と地霊との交感が感知され、描かれている。そしてまた、1地霊の持つ一つの貌、性格も示されている。鋭い感性の持ち主によって感知された地霊の貌や形象が、2特定の座を得て民俗的に伝承されることもある。抑圧された人びとや、精霊が、地霊と複合して叫び、呻く、その声を感知する耳の力も重い。

（野本寛一『地霊の復権』による）

B

楠の字を人名につけることについて、予は明治四十二年五月の『東京人類学会雑誌』二四巻二七八号の三一一頁に次のごとく記した。いわく、「今日は知らず、二十年ばかり前まで、紀伊藤白王子神社畔に、楠神と号し、いと古き楠の木に、注連結びたるが立てりき。当国、ことに海草郡、なかんずく予が氏とする南方苗字の民など、子産まるるごとにこれに詣で祈り、祠官より名の一字を受く。楠、藤、熊などこれなり。この名を受けし者、病あるつど、件の楠神に平癒を禱る。知名の士、中井芳楠、森下岩楠など、みなこの風俗によって名づけられたるものと察せられ、今も海草郡に楠をもって名とせる者多く、熊楠などは幾百人あるか知れぬほどなり。予思うに、こは本邦上世トテミズム(注1)行なわれし遺址の残存せるにあらざるか。三島の神池に鰻を捕るを禁じ、祇園の氏子胡瓜を食わず、金毘羅に詣る者蟹を食わず、富士に登る人鰉を食わざる等の特別食忌と併せ攷うるを要す」（下略）。

予の兄弟九人、兄藤吉、姉熊、妹藤枝いずれも右の縁で命名され、残る六人ことごとく楠を名の下につく。なかんずく予は熊と楠の二字を楠神より授かったので、四歳で重病の時、家人に負われて父に伴われ、未明から楠神へ詣ったのをありありと今も眼前に見る。また楠の樹を見るごとに口にいうべからざる3特殊の感じを発する。

（南方熊楠「南紀特有の人名」による）

（注1）トテミズム……社会がいくつかの集団にわかれ、それぞれが特定の動植物をトーテムとして崇める信仰。トーテミズム。

C

八月の東北は、生きた者も死んだ者も、見えるものも見えないものも、炎のようにゆらぎ、躍動していた。私は旅行の途中、青森、弘前、御所河原とゆくさきざきでねぶた祭に出会ったが、男も女も老人も子どもも参加するイこの祭に、無数の精霊も合体して東北の夏を謳歌しているのではないか、と思わせるほど、東の間の夏の閃光に照らし出された爆発的な興奮が東北の大地を蔽っていた。地霊の叫びに応えようとする反閉(注2)のとどろく音を私は聞いた。むせかえるような大地のロ流動する熱気は異様であった。街は人波にあふれ、とまる旅館もなく、東京に帰る切符も手に入らない八月七日夜の青森市で、港の上空にうち上げられる何百発かの花火を見ながら、最後の夏が爆発しているのだと思った。そこには忍従を強いられるきびしい季節のおとずれをまえにして、北国人のハ夏を惜しむ心情が多彩な花を開いているのだった。このような光景は、白河以北の山野にしか見られない独特なものにちがいなかった。それにしても、西国の夏祭にくらべて、東北の夏祭は――ねぶたの山車の形や描いた絵がどこかリアリスチックなものを欠いているのでも分かるように――ある姿をもっている。この不定形な感じは、是川や亀ヶ岡にみられる縄文文化とも、遠くつながるものである。入り組んだ渦状文や土偶は地霊の叫びの表出のように私には見える。

縄文文化にかぎらずオシラ祭文やイタコの口寄せ、獅子踊や地蔵の縁起、奥浄瑠璃など、東北民衆にながれる伝承文化に一貫しているものは、眼に見えない地霊との Ⅲ である。いやむしろ地霊の叫びを懸命に聴き取ろうとしているかのようだ。そこには二大地への愛着と死者への哀惜が重なり合っている。

（谷川健一「地霊の叫び」による）

（注2）反閉……邪気を払う所作。禹歩ともいう。

問一 Aの文章中の空欄 Ⅰ ・ Ⅱ 、およびCの文章中の空欄 Ⅲ に入る最も適当な語句をそれぞれ次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

Ⅰ　イ　な崇りそ、な恨みそ　　ロ　随尽に、打ち殺せ
　　ハ　修めしめ、民を活かさむ　　ニ　悉尽くに、到り来よ

Ⅱ　イ　排他性　　ロ　象徴性　　ハ　流動性　　ニ　人間性

Ⅲ　イ　融合　　ロ　合一　　ハ　対話　　ニ　対決

問二　Aの文章中の空欄 **甲** に入る最も適当な漢字二文字を、Aの文章中から抜き出し、記述解答用紙の所定の欄に記入せよ。

問三　次の五つの文を適当に並べ替えて、Aの文章中の空欄 **乙** に入れるとしたら、三番目に来るものはどれか。最も適当なものを次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ　そのような場は追いつめられた地霊の拠(よ)りどころであることが多かった。

ロ　地霊・精霊の呻きが聞こえる。

ハ　そうした地霊の座や小さな民俗神の座で、開発の荒波に呑みこまれて消えていったものも少なくない。

ニ　平地の水田地帯、畑地の中には耕地開発の際に残された小さな森や塚があった。

ホ　近代化、開発至上主義の中で、地霊の凝結した場、地霊安息の場、小さな民俗神の座は踏みにじられ、消滅を重ねている。

問四　Aの文章の論旨に合致しないものを次の中から二つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ　古くからあった自然環境を取り戻すためには、単に表面的に自然を元のように変えようというのではなく、地霊や精霊の存在を認めることから出発しなければならない。

ロ　遍在する地霊を考えるに当たって、それがさまざまな土地・動植物と結合して姿を現す凝集点にまず注意することは、有効な方法である。

ハ　時代とともに人々の地霊に対する意識は微妙に変わるのだから、現代のわたくしたちは地霊・精霊に対し、先人とは質の違った近代的な感受性を持つ方が有効である。

ニ　大自然の中で生きる人間の姿を反映したものとして最もわかりやすいものは、人々の生活の中に示される、自然に挑戦するような形のある表象のあり方である。

ホ　谷川健一が「地霊の叫び」を感じたのは、地霊のエネルギーがほとばしり出る時・場所、そしてそれを受け止める人間の心情が、渾然一体となったような経験があったからである。

問五　Aの文章中の傍線部1「地霊の持つ一つの貌(かお)、性格」をよく表している部分を、文章Cの中の五字以上十字以内のひと続きの語句で抜き出すとすれば、どれが最も適当か。記述解答用紙の所定の欄に記入せよ。

問六　Aの文章中の傍線部2「特定の座」とは関わりのない語句を、Cの文章中の傍線部**イ**～**ニ**の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

問七　Bの文章中の傍線部3「特殊の感じ」はAの文章ではどのように言い換えられているか。Aの文章の中から、十三字以上十五字以内のひと続きの語句を抜き出して答えるとすれば、どれが最も適当か。記述解答用紙の所定の欄に記入せよ。

（二）次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

ＳＭＡＰのヒット曲に『世界に一つだけの花』がある。槇原敬之の作詞で、花屋の店先に並んだ花が、他の花と争いもせず背を伸ばして咲いている、という前置きのあと、「それなのに僕ら人間は／どうしてこうも比べたがる？／一人一人違うのにその中で／一番になりたがる？」と問いかけ、「そうさ　僕らは／世界に一つだけの花／一人一人違う種を持つ／その花を咲かせることだけに／一生懸命になればいい」とサト[1]す歌である。

これが「小さい花や大きな花／一つとして同じものはないから／No.1にならなくてもいい／もともと特別なOnly One」という結びになる。

人間社会の無用な競争意識を排して、一人一人の個別性を大切にしようと主張するのはとても良いことだと思えるのだが、最後の「特別なOnly One」という表現には、A どこかしっくりしないものを感じる。それがこの歌では感動を呼ぶ決めフレーズになっているのだが、「特別な」とは何を根拠にした「特別」なのだろうか。

そもそも種の同一性ということと、個体間での個別性とは、もともと異なるカテゴリーであって、混同して語ってはならないはずだ。もしも全員に等しく個別性があるのなら、その違いによる「オンリーワン」とは、種全体のなかの、「特別」でも何でもない「ただの一人」でなければならないはずなのである。

イ

逆にいえば、競争をして「一番になりたがる」のは、このようなB 等しい凡庸さから逃れようとする人間の、せめてもの慰めを獲得しようとする苦肉の策といってもいい。

同じ種のなかで比較されたときに、つねに少数の異常あるいは異端に追いやられ、差別されソ[2]外される人間のために「違い」を堂々と肯定する、これは賛歌なのであり、そういう自分（あなた）であることを「特別なOnly One」として受け入れる決意が示されているのである。「一番になりたがる」同種の人間たちの競争社会で、決してその競争に参加できない「特別な」「一人一人」への応援歌。この歌詞にはこのようなねじれが隠されている。しかし、そのねじれが見えないような能天気さで歌われるとき、一人の個性が「特別なOnly One」にたやすく称揚されるロマン主義が侵入してしまう。そしてじっさいには、「一番」をめざす代わりに「オンリーワン」を目指す別の競争が肯定されてしまうことになる。

ロ

そこにはロマン主義だけでなく、近代の教育のもたらした歴史的な［甲］が横たわってもいる。

近代日本では明治以来、欧米列強に追いつくために立身出世と富国強兵が国策であり、国民教育でも指針とされた。いわば「一番」になるという競争原理は、近代日本が求めた国家的な目標でもあったのだ。しかし太平洋戦争敗北後の民主主義教育では、人権と平和と平等の三原則が大前提となった。

１９４７年に制定された「教育基本法」では、基本方針を「普遍的にして個性豊かな文化」の伝達と涵養（かんよう）としていた。ところが１９８５年に、臨時教育審議会は「個性重視の原則」を教育改革の基本原則とした。

つまり日本文化の「個性」以上に、個人の「個性」が基本原則となったことになる。それ以来、教育基本法の基本理念である「普遍性」と「個性」尊重の教育の並行が始まったのである。そのような趨勢が、さらには悪評高い「ゆとり教育」につながったともいえる。

片方で「平等」と「普遍」をうたいながら、もう一方で「個性」をやみくもに求める。何をもって「個性」というのか、客観的な基準が欠落したまま押しつけられたそのダブル・バインドが、子供たちにとって大きな抑圧となっていったことは想像に難くない。いわゆる引きこもりが出現するようになったのが、この「個性」重視の教育改革以降に育った世代からであるのも偶然とはいえない気がする。

ハ

かつては「一番」になりたがっていた日本人が、一人一人違う「個性」を何より大切に考えるようになる、という文脈は、そのまま近代の教育方針の大きな変遷を示すねじれそのものなのである。そこにまた、近代の日本人をふかく魅了した［乙］的な人間観が温存されてきた原因があったといってもいい。

さて、このようにＳＭＡＰの歌から教育問題にまで話題を広げたのは、他でもない、私たちのなかに自分という一人の存在を、安易な意味での「特別なOnly One」と錯覚したがるロマンティシズムの習性が備わっているからである。それが一人の人間が書く作品に、過剰に個性や独創性を求める習性として反映している。

ニ

そういいきることは、別に卑下ではない。自分は他人と同程度に普通の人間なのだということ、自分の考えるようなことは他の誰かも考えていることなのであり、もとを辿っていけば世界のどこかから流れ着いて広まった考え方なのだということ、——それが現実であることを知ることから出発すべきなのである。

（清水良典『あらゆる小説は模倣である』による）

問八 次の一段落が入る最も適当な箇所を、本文の空欄 イ ～ ニ の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

自分を特別なオンリーワンだなどと思い込んではいけない。同じように、自分のアイデアを天から降りてきた唯一無二の独創だなどと信じてはいけない。

問九 傍線部A「どこかしっくりしないものを感じる」とあるが、その理由として適当でないものを次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ 種の同一性ということと、個体間での個別性を混同しているから。
ロ 差別され、うとんじられる自分であることを受け入れているから。
ハ この歌詞にはねじれが隠されているから。
ニ 「一番」をめざす代わりに「オンリーワン」を目指す別の競争が肯定されているから。

問十 傍線部B「等しい凡庸さ」と同じ意味で使われている言葉を次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ 無用な競争意識
ロ 種の同一性
ハ 「ただの一人」であること
ニ 同種の人間たちの姿

問十一 空欄 甲 に入る最も適当な語句を次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ 競争社会　ロ ねじれ　ハ 基本原則　ニ 普遍性

問十二 空欄 乙 に入る最も適当な五文字以下の語句を本文中から抜き出し、記述解答用紙の所定の欄に記入せよ。

問十三 次の中から本文の趣旨と合致するものを一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ 「特別なOnly One」という表現は、競争に参加できない「特別な」「一人一人」への応援歌のようにみえるが、そこには一人の個性を称揚するロマン主義が侵入してしまっている。
ロ 「特別なOnly One」という表現には、近代以降、一貫して平等であることと同時に個性的であることを求めてきた、日本の教育の矛盾が影を落としている。
ハ 「特別なOnly One」という表現には、安易なロマンティシズムの習性が備わっており、自分は他と違って特別な一人だという錯覚がある。
ニ 「特別なOnly One」という表現は、自分は他人と同程度に普通の人間であり、自分の考えるようなことは他の誰かも考えているという現実を隠蔽している。

問十四 傍線部1・2と同じ漢字を含む熟語をそれぞれ次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

1 イ ユ快　ロ ユ断　ハ ユ旨　ニ 快ユ
2 イ 空ソ　ロ ソ悪　ハ ソ置　ニ ソ追

（三）次の甲・乙・丙の三つの文章を読んで、あとの問いに答えよ。

甲　次の文章は歌人である塚本邦雄による詩歌論である。

現代の詩歌は、その本来の使命である「うたうこと」からかなり遠くへだたってしまった。「書くこと」すなわち「読まれること」が前提とされた、現代詩歌人の作品は、印刷技術とともに高度の水準に達し、そのまま窒息状態にあるとも言えよう。

戦後、特に散文詩が言葉の音楽性を否定し、あくまでもイメージの構築、思考の造形を追求することによって、過去の抒情詩の性格をあらためようとした時から、この傾向は当然予測されることだった。五句三十一音の独特の調べを、奴隷の韻律とまで嫌悪された短歌も、前衛歌人の手で急速に韻律の質を変え、形象をあざやかにし、その半面いわゆる肉声からは、あえて離れようとしてきた。俳句についてもその動きはほぼ同様であり、幾人かの代表作家の作品群は、一時代を画した新しい輝きと重みをもって、現代定型詩の華となってきている。

うたごえを回復しよう、まず調べを――というリアクションは、底流として常にあった。単に立場を異にする陣営からばかりではなく、1新しい作家の内部にも、試行のブレーキとして内在していた。当然の欲求ではあるが、これを優先的なテーゼとすることは、多くの問題を含んでくることになろう。

『新文学』38の座談会「詩は文字による芸術ではない」は、その意味でタイミングを得たものであり、片桐ユズル氏の言葉と文字のあいまいな区別に対する再検討、音楽性と造形性という比較不能の次元の並列への反省は詩歌の現状の盲点をついたものであり、小野十三郎氏の発言の中の「ソビエト作家を迎えてのパーティーの席上、自作を朗読したが、全く手ごたえがなく、代わりに石川啄木の短歌を朗詠したところ、通訳を要せずに、電流のごとく感応するものがあった」という意味のエピソードは、発言者が小野氏だけに、特に歌人には奇妙な感動をさそうものがある。

だがこの調べの切実感、あるいは「朗々誦すべき」などの形容詞に、再びだまされてはならないだろう。表面的な歌ごえの回復はむしろ易いことである。そしてそれは、戦後詩歌の歩みの中で、リバイバルを、パターンの交代を繰り返すだけという結果をもたらすおそれがあろう。ギンズバーグやエフトシェンコらの発表形式が、主として朗読会にあること、あるいはプレベール作詞のシャンソンが世界中に愛唱者をもっていることは、たしかに重い他山の石であり、歌うことはもとより、読まれることすらこばむような、現代詩歌への苦い教訓には違いない。

だが、少なくとも戦後から現在にいたる、人間の必然によって変貌を重ねてきた詩歌に、単に［　I　］をのぞみ、記紀、万葉の模範を提示することで、真の意味の「うた」が回復できるだろうか。作者は書くことによって、読者は読むことによって、無意識に、高らかに「うたっている」のではなかろうか。

短歌がはじめてはっきりと詩論をもったのは『古今集』以後、なかんずく藤原定家からであった。そして中世以後、短歌は主として読まれる詩として書かれてきた。発表方法が歌合であろうと曲水の宴であろうと贈答であろうと、短歌は万葉のオーラル・メッセージ（口頭伝達）から、目を通して心へという秘伝を会得した。芸術性を得ることによって、享受者を限定したことは、あるいは短歌の不幸でもあったろう。そして一方には『梁塵秘抄』を筆頭とする、遊芸娯楽のための、口から耳へ伝わり、万人に愛唱される歌謡の、生き生きとした肉声の流れがあった。二つの歌は、その発生の基盤と機能を異にしながら、互いに融和し、重なりあって、伝統をかたちづくってきたのだ。

近世の連歌、俳諧、和詩の系譜も、その背後にある『閑吟集』『田植草紙』『松の葉』等々、無署名の、遊びの歌の流れをぬきにしては考えられない。伝統はたちきられた。

今日現象的に、詩歌をより広く、より多く歌われるという面にだけ集約して評価するならば、歌謡曲を越えるものはあるまい。斎藤茂吉の全歌集は、一枚の美空ひばりのＬＰの作詞者に膝を屈することになり、吉岡実の詩集一巻は「ブルー・シャトー」の詩にかなうべくもないだろう。しかし言いかえれば、唱和者の量は、必ずしも作品の質の保証にはならない。現代詩歌に耳と口を与えるねがいが、そのまま、生理的に快く、精神の苦痛に無縁な、安易な感傷性へのスライド方式におちこんでは、戦後二十数年の変革の試みも成果も水の泡となろう。

詩歌は万人に愛唱されることを望みながら一方では少数のすぐれた理解者にささえられる孤独な文芸であることをねがっている。そしてまた愛唱、愛誦の質も、当然愛読というかたちに変ってきているのだ。声をもつことよりも、目からたましいへ、いかに深くくい入るかが問題ではあるまいか。

ぼくは式子内親王を、松尾芭蕉を、与謝野晶子を、安西冬衛を、ランボーを、李賀を愛誦する。それらは決して耳や口に快いものばかりではない。声で聞くならば、了解不能のものも多いのだ。文字をメディアとして、初めてそれらの詩の本質的な感動は心に及ぶ。

文字をもたなかった古代と現代、戦争前と後の精神のありかた、公共の広場での絶叫になれた人種と、言挙げせぬ美徳、余情の美学をもつ民族、警世の詩と悲歌、それぞれのジャンルと次元において、創作方法も発表方法も、享受態勢も、千差万別であり、それでよいのだ。詩歌の困難な時代に「うたうこと」は、そしてその時一番大切なのは、詩が文字か言葉かの議論もさることながら、2詩は志であるということの再認識であり、太初にあった言葉はロゴスだという、これだけは決して変ることのない理念の高揚であろう。

志やロゴスに無縁なものには、いかなる真の詩歌も、愛誦されることはない。否、愛誦されることをこばむのが、まことの現代の詩歌なのである。

（塚本邦雄「歌の回復」による）

注　ギンズバーグ……アメリカの詩人。一九五〇年代半ば以降サンフランシスコを中心に活躍した。一九二六～九七。
エフトシェンコ……ロシア（旧ソ連）の詩人、小説家、映画監督。一九三三～。
プレベール……フランスの詩人、シナリオ作家。一九〇〇～七七。
ブルー・シャトー……ジャッキー吉川とブルーコメッツが一九六七年にヒットさせた歌謡曲の題名。
ランボー……フランスの詩人。ボードレール以後のフランス近代詩を代表する詩人の一人。一八五四～九一。

乙　次の文章は藤原俊成による歌論である。

なほ歌の道、かやうに知りがほに申し侍る事、かへすがへすかたはらいたく侍れど、且つは神鑑をおそるるによりて、所存かさねて申しのぶべく侍るなり。おほかた歌は、必ずしもをかしきよしをいひ、事のことわりを言ひきらむとせざれども、もとより詠歌といひて、ただ詠みあげたるにも、打ち詠じたるにも、何となく艶にも、幽玄にもきこゆることの有るべし。よき歌になりぬれば、其の詞姿のほかに、景気のそひたるやうなることあるにや。例へば、春の花のあたりに霞のたなびき、秋の月の前に鹿の声をきき、垣根の梅に春の匂ひ、峰の紅葉に時雨の打ちそそぎなどするやうなる事の、うかびてそへるなり。常に申すやうには侍れど、かの月やあらぬ春や昔といひ、結ぶ手のしづくに濁るなどいへる、何となく［Ⅱ］きこゆるなり。かやうなる姿詞に詠み似せむと思へる歌は、近き世には有り難きことなるを、この近き年よりこのかた、見え侍る御百首にも、且つはこの御歌合こそ誠に有り難きこととは見え侍れ。すべてこの道はいみじくいはむと思ひ、古きものをも見尽さむとするにも、更によらざるべし。

（藤原俊成「慈鎮和尚自歌合」・十禅師跋による）

注　景気……和歌や連歌の用語。言葉が直接喚起する情緒・映像ではなく、言葉では捉え切れない雰囲気のこと。
結ぶ手のしづくに濁る……「結ぶ手のしづくに濁る山の井のあかでも人に分れぬるかな」という紀貫之の和歌の一節。

丙　次の文章は中国、中唐の詩人李賀の臨終の場面を描いたものである（返り点・送り仮名を省いた箇所がある）。

長吉将死時、忽昼見一緋衣人、駕赤虬、持一板書若太古篆或霹靂石文者、云、当召長吉。長吉了不能読。歔下榻叩頭言、阿孃老且病、賀不願去。緋衣人笑曰、帝成白玉楼、立召君為記。天上差楽、不苦也。長吉独泣、辺人尽見之。少之、長吉気絶。常所居窓中、勃勃有烟気、聞行車嘒管之声。太夫人急止人哭。待之如炊五斗黍許時。長吉竟死。

注　長吉……李賀の字。　緋衣……赤い衣服。
赤虬……赤色をした竜の一種。仙人や道士が乗るとされる伝説上の生き物。　霹靂石文……古代文字。
阿孃……母親。　嘒管……微かで澄んだ音色の笛。　太夫人……李賀の母のこと。

（李商隠「李賀小伝」による）

問十五　甲と乙の文章中の空欄［Ⅰ］・［Ⅱ］に入る最も適当なものをそれぞれ次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

Ⅰ　イ　イメージの構築　　ロ　言葉と文字　　ハ　口と耳　　ニ　あざやかな形象　　ホ　音楽性と造形性
Ⅱ　イ　有り難く　　ロ　かしこく　　ハ　ゆゆしく　　ニ　いやしく　　ホ　めでたく

問十六　甲の文章の傍線部1「多くの問題」の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ　精神の苦痛に無縁な、安易な感傷性へのスライド方式に落ち込んでしまうこと。
ロ　読まれることすら拒否するような現代詩の潮流ができてしまうこと。
ハ　人々に愛誦されず、享受者が少数のすぐれた理解者に限定されてしまうこと。
ニ　音楽性と造形性という詩歌の対立構造に目を背けてしまうこと。
ホ　「うたうこと」でしか、本質的な感動を得られなくなってしまうこと。

問十七　甲の文章の傍線部2「詩は志である」の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ　詩歌は孤独な文芸でありながら、万人に愛唱されることも心がけるべきものだということ。
ロ　詩歌は音楽性と造形性のどちらも尊重するものであるということ。
ハ　詩歌は文字をメディアとして、作者の思想・信条をリズムにのせて表現するものだということ。
ニ　詩歌は本来の使命である「うたうこと」を回復するものであるということ。
ホ　詩歌はたましいの奥深くから発せられる思いを重んじるものであるということ。

問十八　詩歌の理想的なありかたに関する、甲・乙両者の立場や考え方の相違もしくは共通点についての説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ　耳で聞くだけならば了解不能なものが多い芭蕉や李賀などを愛誦する甲の作者の考え方は、言葉では捉え切れない幽玄美を理想とする乙の作者の芸術観と共通する。
ロ　音楽性と造形性を兼ね備えた詩歌に価値を認める甲の作者にとって、「景気」を重んじる乙の作者の姿勢は共感できるものといえる。
ハ　歌ごえの回復を目指す甲の作者と、季節と景色が程よく調和した詩歌を愛する乙の作者とでは、同じ芸術観を共有していない。
ニ　情念に訴えかける歌を尊重する甲の作者と、口に出してみて何となくいい歌というのを理想とする乙の作者とでは、詩歌に対する視点が異なっている。
ホ　目から心へという甲の作者の芸術理念は、詩歌には幽玄美を詠み込むべきだという乙の作者の考え方と近いものがある。

問十九　乙の文章の傍線部3は、「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」という和歌の前半部分を抜き書きしたものである。この和歌の作者が活躍した時期より古い時代に成立した作品を次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ　更級日記　　ロ　文華秀麗集　　ハ　狭衣物語　　ニ　伊勢物語　　ホ　古今和歌集

問二十　乙の文章の傍線部4「いみじくいはむ」の意味の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ　思いをそのまま素直に詠じること。
ロ　季節にあった和歌を作ろうとすること。
ハ　意味がわかりやすい言葉で詠もうとすること。
ニ　よい言葉を選ぼうと意気込むこと。
ホ　情緒豊かな歌になるよう心がけること。

問二十一　丙の文章の傍線部5「立召君為記。」の意味として最も適当なものを次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ　早く君主を白玉楼にお連れして、記念としたい。
ロ　君主のために召使いにならないといけないことを肝に銘じてほしい。
ハ　天上界にやって来れば、地上での苦しい記憶も楽しいものとなるだろう。
ニ　白玉楼をたてた記念のためにお前を召抱えたい。
ホ　早くお前を呼び寄せて、白玉楼に題する文章をつくらせたい。

問二十二　丙の文章の傍線部6「待之如炊五斗黍許時。」の訓読として最も適当なものを次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ　之五斗の黍を炊ぐ時を待ちて許すが如し。
ロ　之五斗の黍を炊ぐ時の如く、待つを許す。
ハ　之五斗の黍を炊ぐ許りの時を待つが如し。
ニ　之を待つこと、五斗の黍を炊ぐ許りの時の如し。
ホ　之を待つこと、五斗の黍を炊ぐ時を許すが如し。

〔以　下　余　白〕